

序論

歴史的町並みを中核とする地域における総合防災の考え方と進め方

北関東の伝建地区の現状を俯瞰的に整理すると図1のような状態として説明できる。図は地域防災力を時系列で模式的に考えたものである。郊外型大型商業施設の進出や流通構造の変化などによって、歴史的町並みが残る市街地は生活や生業の場としての魅力を失い、後継者の土地離れが後を絶たない。それは地域の少子高齢化と空き家化を加速的に進行させている。このような状態が目立ち始めると地域の活力は低下し、地域活動も疎かになり、伝統的な祭りの維持も危ぶまれる。一方、放置された空き家は劣化が加速的に進行する。コミュニティの低下や建物の劣化は、防犯・防災上脆弱な地域になり得る大きな因子となる。しかし、空き家を相続した遠方に居住する親族に地域への愛着は無く、歴史的価値の高い建物でも結果的に空き家は解体や市への譲渡に至り、生活景も含めた地域固有の景観の破壊が進む。こうした負のスパイラルによって地域活力が低下している中で、ひとたび災害が発生すると脆弱な面が多い歴史的町並みの予防力や回復力に関わる技術や体制の不備が露呈する。また、防災まちづくりや歴史まちづくりなどの地域づくりを進めようとしても、これまでに災害が少なかったことや、訪れる

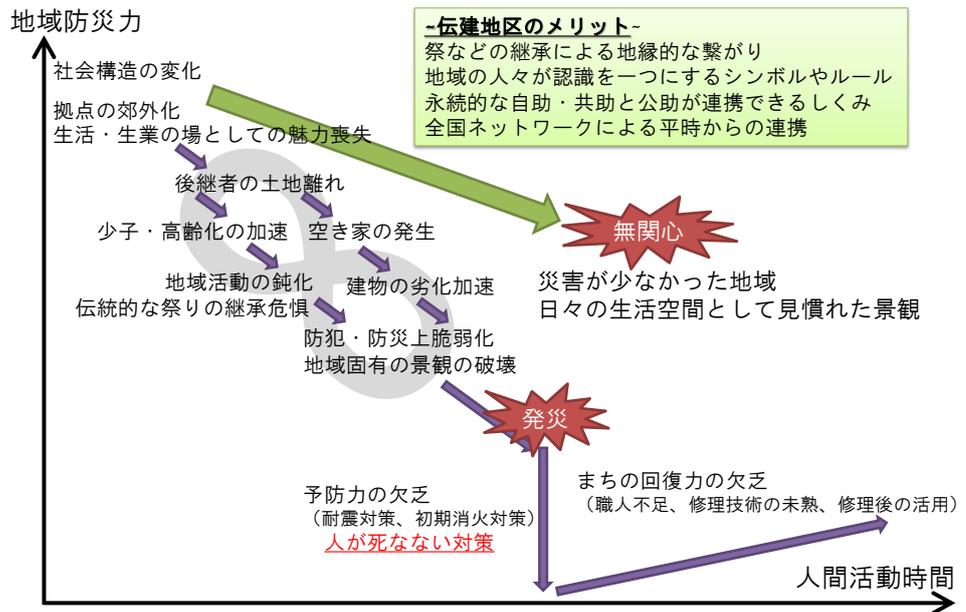


図1 北関東の伝建地区の現状のイメージ

また、防災まちづくりや歴史まちづくりなどの地域づくりを進めようとしても、これまでに災害が少なかったことや、訪れる

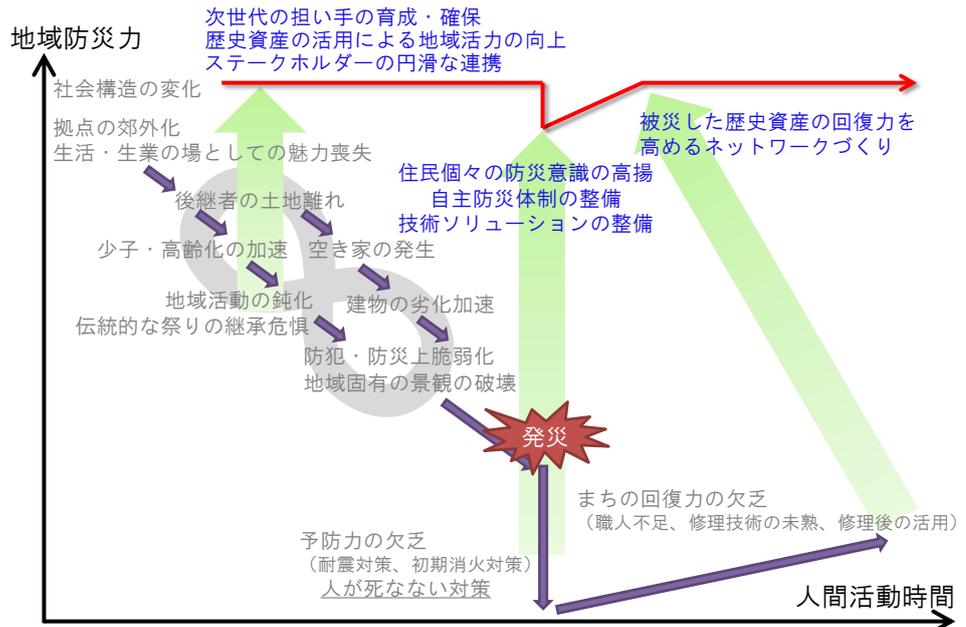


図2 歴史的町並みにおける総合防災のイメージ

人には魅力的に感じる町並みも暮らしている人にとっては日々の生活空間として見慣れた景観であることが、そこで暮らす人々を無関心にさせていることも地域防災力を低下させる一因となっている様子が窺える。

そこで、歴史的町並みという明確な地域づくりの中核を有する地域における総合防災のあり方を図2に示す。地域の防災力を高めるためには、①地域活力を高めること、②予防力を高めること、③回復力(対応力)を高めることの大きく3本の柱を考える必要がある。①では平時から地域の防災力を高く維持するために、“地域の歴史や伝統文化を活用して多様なステークホルダーとの繋がりを維持する場”と“地域の活力を高める仕掛け”をつくり、担い手の育成や歴史的資産の活用、連携体制の強化を進めることが必要と考える。②では、万が一災害が発生した場合でも地域防災力の急激な低下を阻止するために、被害を最小限に留めるための予防力を高める整備が必要である。さらに③では、歴史的町並みの早期的復興を可能にする回復力を高める経験知の蓄積やネットワークづくりが必要である。

研究開発プロジェクトの実施項目と俯瞰的な流れを図3に示す。まず地域では、小中高校生を対象とした小論文や絵画・写真のコンテストの開催や、伝統技法の体験、祭への参画、市民団体主体の空き家再生・活用、地域住民のまち歩き、広報活動などの取組みを企画・実施し、伝統や文化の再発掘と創造を通じて、地域に対する関心を高め、地域の将来に有望なヒトづくりを推進した。それと並行して研究者は、先進事例の調査や予防力を高める技術で十分に検証されていない技術の科学的検証を進めた。これらの地域の人々の関心の高まりと蓄積された技術的背景を使い、地域のステークホルダーが議論し共同体意識を高めるワークショップ等の場づくりを行った。また、研究者を中心とした専門的な知見を地域の人々と共有したり、地域づくりの方向性を地域の人々の間で共有するためのコミュニケーションツールとして、3DCG や模型の製作、および GIS による情報管理・共有システムを開発し、ワークショップ等の場で活用した。そして、それらの取組みを通じて、互いの信頼関係を深め、持続可能な体制づくりを進めた。

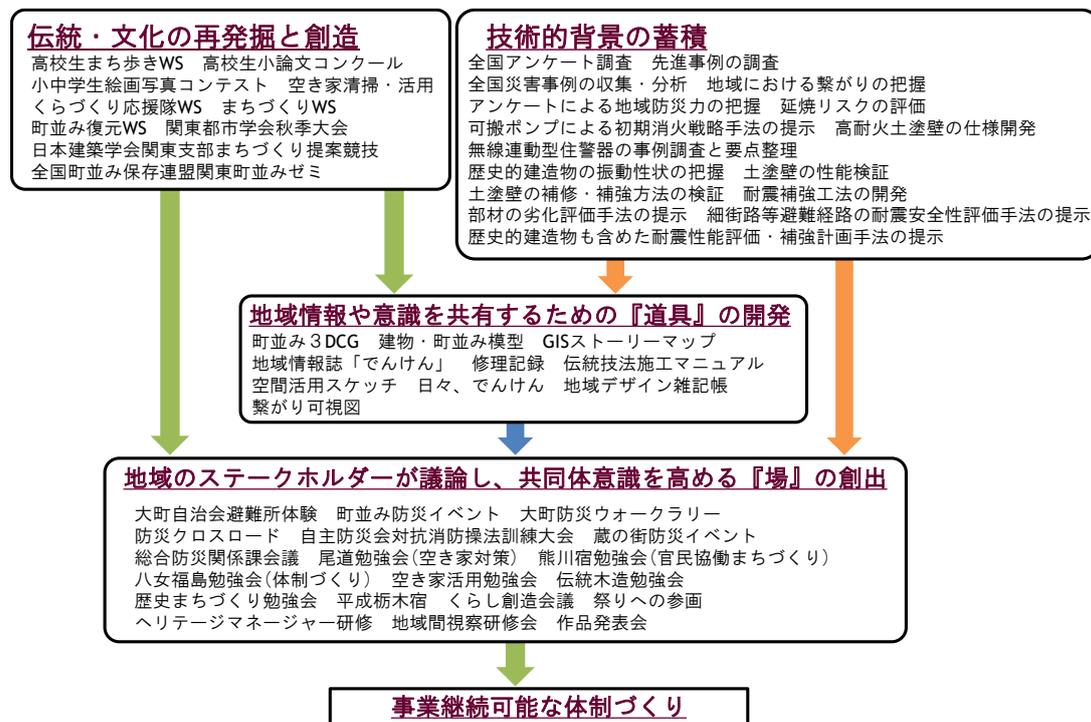


図3 研究開発プロジェクトの実施項目と俯瞰的な流れ